

遠里小野遺跡発掘調査(OR07 - 2次)資料

2007(平成19)年9月29日(土)

大阪市住吉区遠里小野7丁目

大阪市教育委員会(財)大阪市文化財協会

大阪市教育委員会と財団法人大阪市文化財協会は、今年の6月下旬から府営両国東住宅の建替えに伴う発掘調査を行ってきましたが、古代の大型の掘立柱建物を検出するなど、大きな成果がありました。

遠里小野遺跡は昭和初期に発見され、昭和14(1939)年には今回の調査地の東約100mの地点で大阪府により小規模な発掘調査も行われています。それ以来、網につける素焼きの土錘や小型の蛸壺形土器などの漁具が多く出土することから、大阪湾に臨む弥生～古墳時代の大規模な漁撈集落として学界の注目を集めてきました。

当地周辺の近年の調査では、昭和14年の調査地のすぐ北で、6世紀後半の土壌から、滑石製の管玉・白玉、加えてその未完成品が多量に出土し、祭祀用の滑石製品の生産地であることが判明しました。また、東約250mの新大和川右岸で7世紀後半の楼閣風建築と思われる掘立柱建物(5間(15.4m)×4間(13.8m))が発見され、南東約500mで7世紀後半を創建期とする榎津(えなつ)廃寺のものと考えられる古代の瓦が出土するなど、大和朝廷との関係を窺わせるような遺構・遺物が見つっています。

今回の調査では、7世紀前半頃と考えられる東西棟の大型の掘立柱建物跡を検出しました。この建物の方位は真東西を示し、梁行3間(約7m)桁行9間(約21m)以上で、柱の芯々間は梁行・桁行ともに約2.3mで、柱痕跡の直径40～50cmを測り、当時としては難波宮など宮殿の建物クラスの太さです。ちなみに前期難波宮の朝堂院東第二堂は、今回の建物と同じ梁行3間の建物で、寸法も約7mと同規模です。しかし桁行は7間で約21mと、今回の建物より小規模となります。

調査地付近には、古代に「住吉の得名津(えなつ)に立ちて見渡せば 武庫の泊ゆ 出る船人(万葉集)と歌われた「榎津(えなつ)」と呼ばれる港があり、それは現在、新大和川に流路を取り込まれている旧「狭間(はざま)川」を遡った地にあったと考えられています。当地は旧狭間川右岸、ひいては古代港「榎津」の入口に立地する可能性が高いといえます。また東方には5～6世紀には大和朝廷の直轄地であった「依網屯倉(よさみのみやけ)〔語句説明参照〕の推定地があり、人や物資の輸送面で「榎津」の港との関係も想定されます。

【語句説明】『新修大阪市史』第1巻(1988年)より)

依網屯倉：5～6世紀からの大和朝廷の直轄地で、範囲は大阪市住吉区の南東部から松原市の北西部にかけてと推定され、隣接する堺市北東部も含まれる可能性がある。

仁徳紀43年9月条

依網屯倉の阿弭古(あびこ)が網を張って怪しい鳥を捕って天皇に献じた。天皇は酒君(さけのみ)を召してこの鳥をみせ、鷹とわかったので、酒君に養わせた。また別の説として、鷹甘部(鷹養部に同じ)を定め、鷹を養う処を「鷹甘邑」といったとある。現在の大阪市東住吉区の鷹合付近と思われる。

皇極紀元(642)年5月条

河内国の依網屯倉の前で百濟の義慈王の子翹岐(ぎょうぎ)等を召して、射獵を觀せた。

依網池：依網屯倉の成立と関係があると思われる依網池の築造は、崇神紀62年条、仁徳記、推古紀15(607)年条などにたびたび現われる。大阪平野の開拓の進行する5～6世紀頃に築造され、推古朝に修築されたと考えられる。現在、住吉区庭井2丁目南西に依網池と呼ばれる池があるが、

宝永元(1704)年に付替えられた新大和川が横断したために縮小している。屯倉の管理には、依羅阿弭古(よさみあびこ)の氏姓を持つ豪族が経営に当たったと思われ、阿弭古(我孫子)は朝廷と関係の深い豪族に与えられる官職に類する称号の可能性がある。

〔註〕天皇名の後の「紀」「記」の文字は、「紀」が『日本書紀』、「記」が『古事記』からの出典であることを示す。

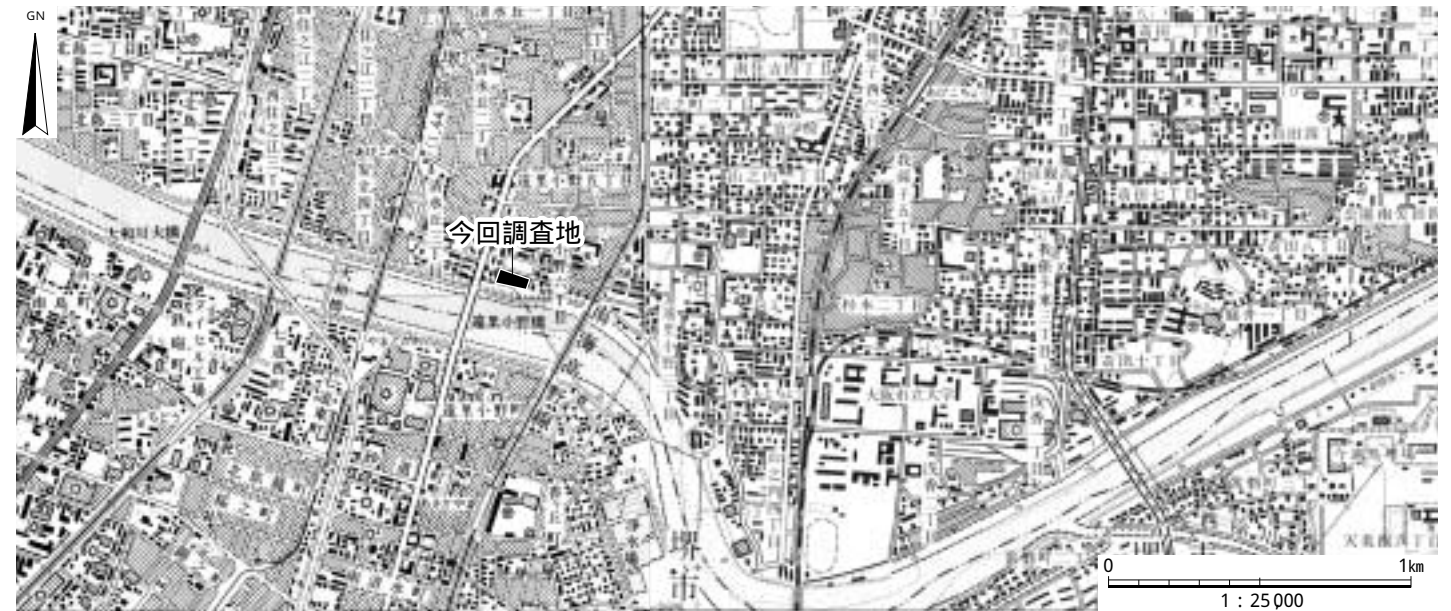


図1 調査地の位置(国土地理院、1:25000)

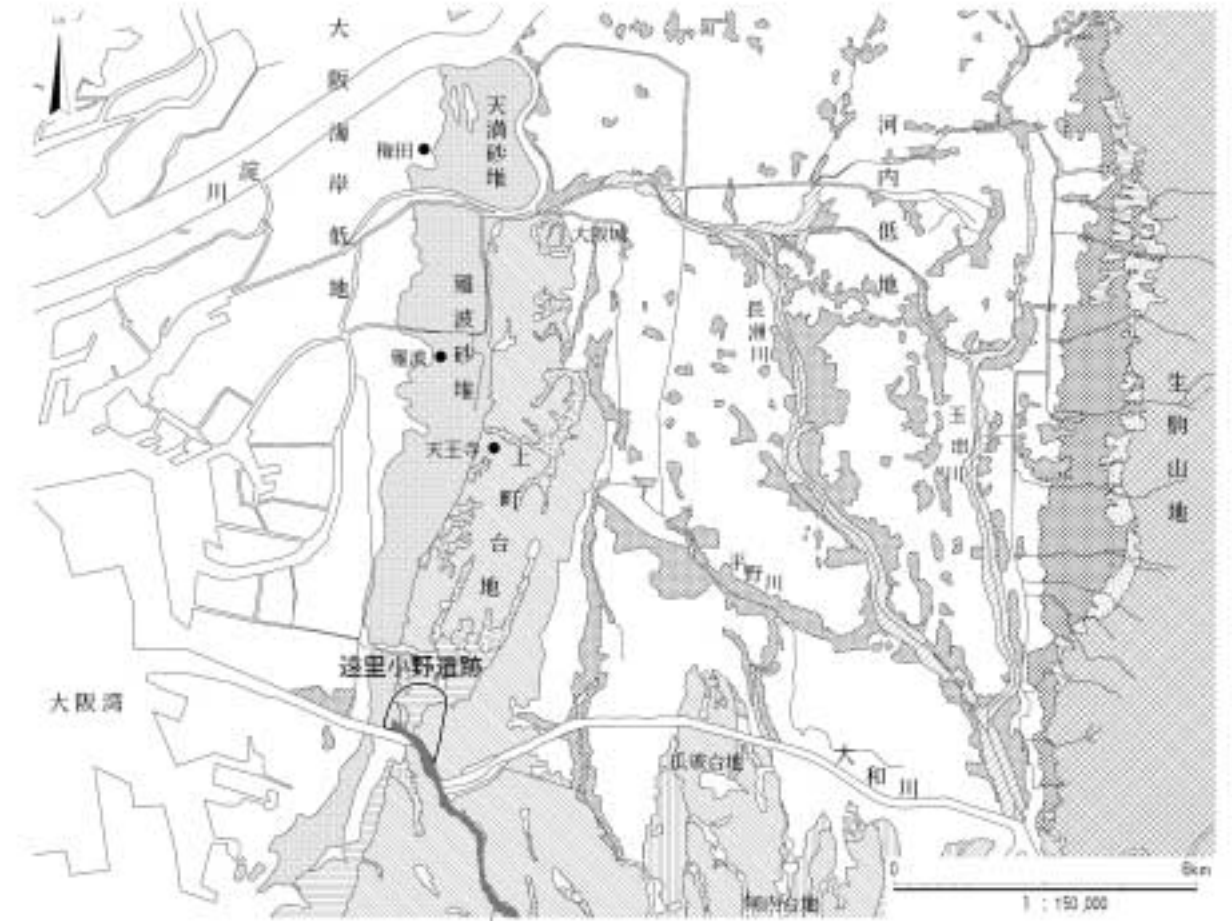


図2 123年前の地形図(明治17年、内務省)



今回調査地の右側の が昭和14年大阪府調査地および滑石製玉類出土地

図3 遠里小野遺跡の範囲と地籍図



推定「狭間川」の旧流路



図4 地形分類図

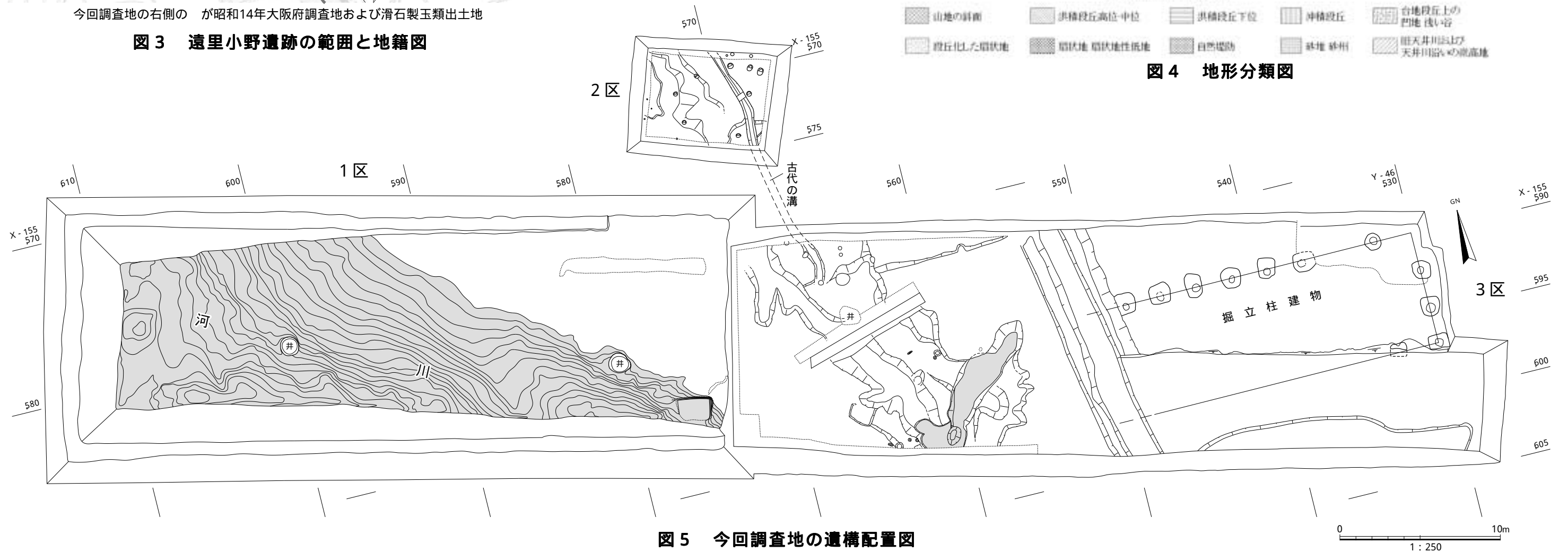


図5 今回調査地の遺構配置図